

様式2
令和4年度 自己評価表（中間評価）

鳥取県立米子工業高等学校

校訓	自律 創造 協働	中長期目標 (学校ビジョン)	ものづくりができる人づくり ものづくりを通しての人づくり	米工ミッション	地域社会・産業界に貢献する人財育成	今年度の 重点目標	1 心身の健全な育成と工業高校生としてのエチケット・マナーの実践 2 キャリア教育による生きがいの創造 3 持続可能な社会を創造し貢献できる工業人の育成 4 地域ネットワークによる教育の実現 5 向上心とワークライフバランスの実践
				目指す生徒像	自主自律の精神を持ち、他者を思いやる 創造力豊かな工業人		

年 度 当 初						中 間 評 価 結 果		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 心身の健全な育成と工業高校生としてのエチケット・マナーの実践	(1) 生徒指導の徹底	・教職員間で連携しながら定期的に頭髮服装指導を行うことで指導を受ける生徒が減少している。 ・スマートフォンのなどのICT機器の使用方法の見直しに、生徒や教職員の意見を反映させた。	・就職試験をすぐにでも受けられる身なりや生活態度で日常生活を過ごしている。 ・ルール、マナーを守りながら校内でICT機器を使用している。	・生徒「自分のエチケット・マナーが向上した」 保護者「本校はルールやマナーを守る指導が適切に行われている」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・安全にチームで作業を行う工業人として社会に受け入れられることを意識させ、規律とマナーの向上を自覚させる。 ・学校の指導方針を生徒、保護者に周知し指導に当たる。 ・職員から積極的に挨拶するなど社会的ルールを尊重する姿勢を示し生徒にロールモデルを示す。	・休憩時間等のICT機器の利用法については、指導が不十分な点もあるが、概ね授業中の利用ルールは確立してきている。 ・大きなSNSトラブルは減少した。 ・教職員は配慮の必要な生徒もいる中で、共通理解しながらルール・マナーの指導に取り組んでいる。 ・身だしなみや生活態度は落ち着いている。	B	・ICT機器の利用法について、生徒会と協力して新しい利用ルールを検討し、ルール化することで、生徒の自発的なモラル意識を醸成する。 ・教職員間で意思統一を図りながら、毅然とした態度で指導を継続する。
	(2) 時間や規律を守る生徒の育成	・遅刻をする生徒が一部に見られる。 ・生徒の挨拶は概ねできているが、職員室等に入室する際の挨拶では不十分な生徒がいる。	・規則正しい生活を送り、学校に遅刻することなく元気に学校生活を送っている。 ・自ら挨拶ができ、場面に応じた言葉遣いができるなど、マナーがさらに向上している。 ・自転車用ヘルメットの重要性を認識し、自転車を使用する時に着用している。	・2学期までの遅刻合計1回以下の生徒が80%以上ならばA。 ・教職員「生徒の挨拶は良い」「生徒の言葉遣いは良い」等アンケートの集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・ヘルメット着用に関するアンケート項目で、着用に肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。	・届けなく遅刻、早退、欠席した生徒の保護者へ連絡を取り、家庭での基本的生活習慣の改善について協力をお願いする。また、生徒が抱える現状を職員が丁寧に聞き取り改善のための適切なアドバイスを行う。 ・登校時、授業開始時など様々な機会を捉えて挨拶の習慣化を図る。 ・保護者、関係機関と協力しながらヘルメットの重要性について周知する。	・自発的に挨拶する生徒が増えてきている。 ・特定の生徒が遅刻を繰り返しているが、保護者と連携・協力しながら改善に努めている。 ・連絡なしの遅刻・欠席が頻発する事情を抱えた生徒(家庭)への対応について、関係機関と連携しながらチーム支援の対応を図ることができた。 ・ヘルメットの着用率が低下傾向にある。	B	・保護者との連絡をより密にし、特定の遅刻者に対して継続的な指導をする。 ・支援の必要な生徒に対しては、引き続き関係機関等と連携しながらチーム支援で対応し、基本的生活習慣の改善を図る。 ・ヘルメット着用の必要性など周知する。
	(3) 部活動と生徒会活動の活性化	・部活動への加入率は高く活発に活動している。 ・コロナ禍においても生徒会を中心に実施可能な生徒会行事等を行っている。	・多くの生徒が部活動や生徒会活動に参加し、満足した部活動を行っている。 ・部活動や生徒会活動をととして、競技力のみならず、人間関係やチャレンジ精神をより高めている。 ・生徒会執行部が主体となった生徒会行事が行われている。	・部活動または生徒会への加入率が80%以上であり、さらに活動をととしての満足度が80%以上ならばA。 ・保護者「本校は部活動が活発である」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・生徒会執行部の70%以上が主体的に活動できたと認識していたらA。	・年度途中で退部した生徒にも、本人の意向を尊重しながら、他の部活への入部を呼びかける。 ・部活動での大会成果や活動をHPや校内掲示板へ掲載し、活動の魅力を伝えることで部活動への加入を呼びかける。 ・定期的に生徒会執行部会を開催し、生徒会行事への意識を高める。	・部活動の加入率は約85%で昨年度を少し上回っているが、運動系の部活動加入率がやや低下している。 ・生徒会長と副会長が高校生議会に初めて参加予定である。 ・「はるかのかひまわり絆プロジェクト」はPTAと人権教育部および生徒会が連携し各作業が円滑に行われている。各クラスは役員だけでなく有志生徒も参加している。	B	・今後も継続的に部活動の魅力発信を行う。 ・はるかのかひまわり絆プロジェクトについては、室長(人権委員)と執行部員以外の生徒の参加をさらに促し、多くの生徒の活躍の場として活用する。
2 キャリア教育による生きがいの創造	(1) 生徒全員の希望進路の実現	・就職希望者については100%の就職率を達成している。 ・進学希望者については国公立大学へ5名合格した。	・進路実現に向けた主体的な取組を行い、生徒が満足できる(納得できる)進路決定を行う。 ・多くの生徒が第1希望の進路先に内定または合格する。	・生徒アンケート「自分は進路指導を受けて、就職先・進学先を決める際に役立った」、「進路実現に向けて計画的に取り組むことができた」、保護者「本校の進路指導等は就職先・進学先を決める際に役立った」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・生徒の第1希望の進学先への内定または合格が90%以上ならばA。	・生徒が主体的に進路選択を行えるよう、キャリアパスポートを活用する。 ・進路状況や進路に必要な知識・技能に係わる情報を、LHRや進路講演会などを通じて適宜提供する。 ・求人票や指定校一覧を生徒各自のICT機器で閲覧できるようにし、家庭で進路決定の資料として活用できるようにする。 ・面接指導、個別指導を実施し、効果的組織的な進路指導を行う。 ・大学進学希望者、公務員受験希望者への計画的な指導対策を実施する。 ・リモートで行われる企業説明会、応募前職場見学などに適切に対応する。	・各学年の進路LHRIにおいて、キャリアパスポートを活用してキャリア教育を行った。 ・進路選択に係る情報提供の場として合同進路LHRや放課後キャリア塾等を行った。 ・求人票や指定校一覧を生徒各自のICT機器で閲覧できるようにした。 ・大学進学者用の模試を計画した。 ・就職希望者(学校紹介)は、全員一次応募で受験した。 ・リモートで行われた応募前職場見学、採用選考に対応した。	A	・就職一次応募で不合格の生徒に対し、時を空けない指導を行う。 ・進学希望者に対し、担任と連携して志望理由書等の指導を行うことに加えて面接指導を組織的に行う。
	(2) インターンシップ及び県内外の企業研修の充実	・コロナ禍においても受け入れ企業が確保できたため、全科でインターンシップを実施した。 ・コロナ禍のため県外企業見学は中止し、地元企業見学は可能なもののみ実施した。	・実際の現場を見学することにより専門科目に対する興味関心が高まり、意欲的に日々の学習に取り組んでいる。 ・企業現場での実習を通して専門的な知識や技術・技能に触れることで、進路に対する意識が高まっている。 ・県外の大手企業を見学することにより多様な職業観が育ち、所属学科や専門科目に対する興味が高まっている。	・生徒「インターンシップは勉強になったし、充実していた」「県外企業研修旅行は勉強になったし、充実していた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・保護者「地元企業見学、県外企業研修旅行、インターンシップ、課題研究等が充実している」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・インターンシップでの受入企業を確保し、実際の現場で作業をさせることにより、仕事の大切さ・意義・困難さを体験させる。また産業界での知識や技術・技能を学ばせることによって、日々の学習への意欲や積極性を喚起する。 ・企業を見学することにより、産業全般に対する認識を深めさせ、将来の進路選択に一層明確な目標を立てさせるとともに、所属学科や専門科目に対する興味関心を喚起する。 ・訪問によらない企業を知る方法を検討する。	・インターンシップについては、受け入れ先企業と連携し、10月下旬の実施に向けて準備を進めている。 ・県外企業研修旅行は新型コロナウイルス感染症の感染急拡大により、12月に延期した。 ・県内企業見学は新型コロナウイルス感染症の感染状況を確認しながら今後実施する予定である。	B	・充実したインターンシップとなるよう企業と連携し、生徒への指導を継続する。 ・県内外の企業研修に向けて、見学予定の企業等と連携を密にし、充実した事業となるよう努める。
	(3) 学力の向上と授業改革	・SPI小テスト・基礎力診断適性検査等を実施し、必要とされる基礎学力のレベルを認識させている。 ・教職員はICTを活用した授業展開の方法や今後の教育のあり方などについて研修している。	・SPI小テスト・基礎力診断適性検査等を活用し、社会人として求められる基礎学力のレベルを認識し、就職試験等に対応できる力をつけている。 ・生徒はお互いに協力し合い、ICTを活用しながら主体的に学んでいる。 ・教職員がICTを活用した授業に積極的に取り組んでいる。	・生徒「SPI小テストに一生懸命取り組んだ」等集約結果が80%以上ならばA。 ・生徒「自分は、授業(座学)が理解できた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・生徒、教職員へのICT活用に関するアンケートにおいて肯定的な回答が80%以上ならばA。	・SPI小テストの実施意義について、年度当初に文書を配布し生徒に説明する。 ・SPI小テストの低得点者などに対して、早期に学び直しの必要な内容をフィードバックし学び方を指導する。 ・オンラインコンテンツを活用し、他校の視察や校内の授業公開などで研鑽を積み、生徒の意欲を引き出す授業を展開する。	・SPI小テストは年度当初に文書を配布し、意義について生徒へ周知した。 ・SPI小テストの低得点者に対して、夏休み前に補習授業や課題提出を行った。 ・今後、学び直しのフィードバック等を行う予定である。 ・オンラインコンテンツを活用し、効果的に授業を展開している教職員が増えている。 ・Findアクティブラーナーを活用している教職員が限定的である。	C	・SPI小テストは2学期末も低得点者に対する補習を行う。 ・指導力向上の手段の1つとして、Findアクティブラーナーなどのオンラインコンテンツの活用を促す。 ・ICTを活用した授業づくりに向けた校内研修を企画する。

年 度 当 初						中 間 評 価 結 果		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	評価基準	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
3 持続可能な社会を創造し貢献できる工業人の育成	(1)ものづくり人材育成事業の充実・発展	・コロナ禍においても参加可能なコンテスト・大会には積極的に参加している。	・ものづくりに対する興味関心が高まり、自ら技術向上に励んでいる。 ・高校生ものづくりコンテストなどに積極的に参加し、上位へ入賞する。 ・保護者「本校は将来にわたって役立つ教育が行われている。」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・課題研究等の活動を支援することで、生徒が高度な技術へ積極的に取り組み、その成果を各種大会で発揮する。	生徒「自分は実習を通じて、技術・技能が身についた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・保護者「本校は将来にわたって役立つ教育が行われている。」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・実習などをとおしてものづくりの楽しさを経験させ、より高い技術習得を意識させる。 ・専門の授業において、ものづくりの楽しさと意義を生徒に伝え、生徒がコンテストにチャレンジする意欲を高める。 ・部活動とのバランスに配慮して取組ができるよう検討する。 ・作品送付、オンライン参加のコンテスト・大会を把握し、前向きに参加を検討する。	・ものづくりコンテストの旋盤作業部門、測量部門、化学分析部門で中国大会へ参加した。 ・測量部門は中国大会で第2位の成績を修めた。 ・ものづくりコンテスト電子回路部門は、県大会に出場予定である。	B	・技術習得、技術向上のための指導を継続的に行う。 ・ものづくりコンテストに出場できていない部門は、積極的かつ継続的に生徒への声かけを行い参加を促す。
	(2)専門的資格取得の推進と「課題研究」の充実	・令和3年度ジュニアマイスター取得者実人数は66名。 ・コロナ禍のため課題研究全体発表会が実施できなかった。	・卒業生の3割(50名)以上が、ジュニアマイスターを取得している。 ・各科の課題研究で新しい研究内容に取組むなど研究内容が充実し、課題研究発表会で分かりやすい発表ができている。	・卒業生の3割以上の生徒がジュニアマイスターを取得すればA。 ・保護者「課題研究が充実している」及び、生徒「課題研究等の取り組みを通して、専門的な学びが深まった」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・資格取得を推進し、それぞれの生徒に必要な資格・検定の選択と受検までの計画の立案を支援する。 ・資格取得に向け、補習や社会人講師によるサポートを行う。 ・課題研究のテーマや研究内容を精選し、生徒が研究内容を理解し発展させながら生徒主体で取組むように指導方法を工夫する。 ・課題研究の計画、中間報告、最終報告をHPに掲載し、取組を公開する。	・生徒は資格取得に向けて意欲的に取り組んでいる。 ・第二種電気工事士は電気科、情報電子科、環境エネルギー科合わせて37人が受験し27名合格した。 ・第三種電気主任技術者は8人受験し科目合格は1名であった。 ・各科課題研究の取組内容について情報発信ができていない。 ・創立100周年記念行事において、各科課題研究の取り組みの一部を発表予定である。	C	・技術取得や学力向上のための補習、講習を継続的に行う。 ・生徒が意欲的かつ積極的に取り組むよう指導を継続する。 ・各科課題研究の取り組みについてHPへ掲載する。
	(3)5S(整理 整頓 清掃 清潔 しつけ)と安全教育の徹底	・実習時に5Sと安全教育を連動させて指導している。	・5Sの意味を理解し安全を意識した行動ができる。 ・5Sや安全への意識を日常生活に活かしている。	・生徒「5Sの習慣が身についた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。 ・教職員「安全教育について概ね徹底できた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・各授業・実習の中で具体的な5Sの取り組みを明示し、実践することで身につけさせる。 ・5Sの考え方を日常生活や部活動などに転用できるよう考えさせ、安全教育を定着させる。 ・整理整頓を促す啓発ポスターを掲示し、5Sの意識付けを行う。	・授業や実習等の各場面において5Sの徹底を指導しており、全体的に定着してきている。 ・整理整頓を促すポスターを掲示し、各面で5Sの意識付けを行えた。	A	・生徒の日常生活の中に5Sの取り組みが浸透するようSHRや授業・実習、部活動においての指導も継続的に行う。
4 地域ネットワークによる教育の実現	(1)地域社会への貢献	・地域貢献活動を各科が積極的に行っている。	・地域の課題を解決する取組や身近な人の困りごとを解決する支援活動により、ものづくりの意義を学び、自己有用感が高まっている。 ・生徒が自ら地域の課題を把握し、課題解決に向けた地域貢献活動を行っている。	・ものづくりをとおして地域社会に貢献するアンケート項目に対する肯定的な回答が全体の80%以上ならばA。	・地域や身近な人の課題に目を向けさせ、自分たちの学びで関わられることを考えさせる。 ・地域や身近な人に具体的な製作物やシステムを提供する生徒の活動にアドバイスと支援を行う。	・今年度もマチナカクリスタルのイベントへ参加予定である。 ・啓成小学校新校舎で使用する木製の椅子を製作した。 ・機械科、建設科では近隣自治体からの依頼を受けゴミストッカー、木製ベンチを製作している。	B	・引き続き地域貢献活動に取り組む。 ・地域連携の中で生徒が地域課題に気づけるような仕掛けを検討する。
	(2)中学校などの異校種との交流・連携	・小学生に対し出前授業を行い、ものづくりの楽しさ等を伝えている。 ・コロナ禍のため中学生体験学習、中学校への出前授業は中止した。	・様々な異校種連携をとおして、小中学校や地域社会の工業教育についての関心が高まっている。 ・出前授業等を行うことによって、小中学生に本校でのものづくり教育への関心が高まっている。	・教職員「中学生体験学習・学校公開等を通して、中学校や保護者へ本校の内容を概ね伝えることができた。」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・中学生体験学習や学校説明会で、ものづくり教育の意義を理解し、関心を高めてもらえるよう内容をブラッシュアップする。 ・ICTを活用した新たな交流方法も検討する。	・コロナ禍のため中学生体験学習は中止した。 ・11月に中学生対象、保護者対象の学校見学会をそれぞれ実施予定である。 ・情報電子科では啓成小学校とのパソコン交流を今後行う予定である。 ・環境エネルギー科では小学校への出前授業を今後行う予定である。	C	・小学校や中学校との交流、出前授業は各校と事前の打ち合わせを十分に行い、よりよいものになるよう準備する。 ・学校見学会は校内での情報共有を行い、滞りなく実施できるよう準備する。
	(3)本校の教育活動の発信	・学校から積極的な情報発信を行い、学校理解を進めている。 ・米工MAKERSを週3回発行している。	・ホームページ、マチコミメール、マスメディア等を通じ、学校情報の発信をタイムリーに行う。 ・米工MAKERSでは学校の取組に加え、生徒の何気ない成長を取り上げた内容となっている。	・保護者「家庭への連絡がきめ細かく行われた」等アンケート集約結果が全体の80%以上ならばA。	・ホームページの内容(学校行事・部活動報告など)を定期的に更新するなど、積極的な情報発信に努める。 ・マチコミメールを活用し、保護者へ情報を迅速に伝える。	・ホームページや米工Makers(火・金発行)を活用し、各科・分掌の取り組みや学校行事など情報発信に努めている。 ・マチコミメールを活用し、保護者への情報提供を行っている。 ・各部活動の情報発信が散発的になっている。	B	・引き続き迅速な情報発信に努める。 ・各部活動の情報発信が積極的に行えるよう、HPへの掲載方法に関する研修会を行う。
5 向上心とワークライフバランスの実践	(1)自己研鑽	・オンラインコンテンツを利用するなど自らを高める取組を実施している。	・自己研鑽に励み、生徒の成長を支援する力量を高めている。	・研修会に参加するなど具体的な取組を実施した。	・自ら高めたい目標を設定している。 ・研修案内を意識し、積極的に参加する。 ・今後必要となる専門的な知識・技術の習得のため教育書籍やオンラインコンテンツを活用する。	・一部の教職員は、積極的に研修に参加し自己研鑽に努めている。 ・職員室掲示板等を活用し、研修案内を提示している。	B	・引き続き研修案内を提示し、積極的な参加を促す声かけなどを行う。 ・自己研鑽の時間が確保できるよう定時退勤を促す。
	(2)ワークライフバランスの取組	・多くの教職員の時間外業務時間が削減されている。 ・計画的に業務を行っている。 ・部活動計画を立て長時間の勤務にならないよう取り組んでいる。	・必要なものが必要なときにすぐ取り出せる状態にある。 ・業務上の様々な資料について、再利用、共有できる状況にあり、次に業務に当たる職員が円滑に取り組み、業務に当たる時間が削減されている。 ・部活動は平日3時間以内、休日(週休日・休業日含む)は4時間以内、土日のどちらかは休みを実践。 ・職員、生徒共に家族や地域での活動時間、自己研鑽時間が確保できている。	・教職員「ものの定位置を決め、実践できた」職員が80%以上ならばA。 ・全教職員が時間外業務月45時間以内、年間合計360時間以内ならばA。	・ものを置く場所を決め、定位置に置くことを励行し、整理整頓に努める。 ・各自が資料の整理方法についてルールを決め実践する。 ・担当した業務において、気づいた改善点はすぐに反映させ、資料の修正、送り送り事項を作成する。 ・先を見通した業務計画、準備計画を作成し実施する。 ・部活動計画を立て、長時間勤務を防止する。	・各教科・各分掌に割り振られている印刷室、資料室の棚の整理及び再配分を行った。 ・9月末時点で時間外業務時間が月45時間を超えた教職員は延べ8名、6ヶ月の合計時間が180時間を超えた教職員は5名となった。 ・業務改善に向けた教職員の個人提案を集約した。 ・年度末までに業務改善シートの作成を呼びかけた。	C	・個人の時間外業務時間を把握するために時間外業務の状況を2学期末までに提示する。 ・部活動実績を確認し、適切な部活動計画に反映させる。 ・年度末までに各教職員が業務シートを作成する。

評価基準	※評価基準に複数の目標を設定している場合、全ての目標を達成してA評価とする
アンケート結果によるもの (部活動関係も準ずる)	A 80%以上 B 70%以上～80%未満 C 60%以上～70%未満 D 50%以上～60%未満 E 50%未満